

滋賀大学体育会弓道部における指導の変遷

—四半世紀の縁—

森將豪 / 滋賀大学 名誉教授

1. 序にかえて

陵水100周年記念の彦根論叢に運動部の特集を組むので、弓道部について書いてほしいと原稿依頼があった。弓道部は彦根高等商業学校創立とともに創部された数少ない運動部の一つであり、その草創期に遡って言及することは筆者がないうることではない。古い歴史や、歴代弓道部員の輝かしい足跡および戦績の数々については、弓道部の多くの先輩方がしたためられた年誌や弓道部誌『弦音』創部100周年記念号に詳しく述べられているので、ここでは私が顧問を引き受けた平成元年から定年退職する（平成26年3月）までの四半世紀の忘れがたい出来事について記すことでお許しを願いたい。

本特集号の執筆者の先生方は顧問であるとともにその分野の優れた競技者であり、それゆえに指導者も兼ねておられる。一方、筆者の場合は単なる顧問であり指導者ではないのに、なぜこのような者が顧問となったのか、そのいきさつから書くことにする。

2. 顧問となった経緯

ある日、停年退官を間近かに控えられた小倉栄一郎教授に呼ばれた。何事かとお伺いすると、「もうすぐ停年で退官をする。現在、いくつかの運動部の顧問をしているが、私は彦根高商時代弓道部に属して弓道には特に思い入れがあるので、弓道部の顧問はぜひ君に引き受けてもらいたい。」と要請された。私には弓道の経験が全くないので辞退申し上げると、「顧問という立場は大学の内部から部活動を支えるものであり面倒を見てやって欲しい。どうか引き受けてもらえないだろうか。」とおっしゃられた。小倉先生とは同じ父祖の地である彦根に生を受け、父もまた彦根高商に学んでいたことを考えると、これはもう「縁尋機妙多逢聖因」に他ならないと思い顧問を引き受けすることにした。先祖が彦根藩の弓組か鉄砲組に属し日頃鍛錬していたことを思うと、何やら縁みtainなものを感じたのである。このようにして、私は弓道部の学生諸君が心おきなく活動できるよう大学の内部から弓道部を見守り支えることになった。

3. 弓道部員に諭し続けたこと

顧問を引き受けてから分かったことは弓道部の留年率の高さであった。年度末の卒業・進級判定会議に出席する度に、喉に小骨が突き刺さっているような不快なやりきれない気分になった。何とかせねばならぬと思案していたところ、十数年前のことが鮮やかに思い出された。

当時、私は並行処理系の理論に関する研究を行っていたが、なかなか思うような結果は得られなかった。これまでの研究結果を恩師に報告すると、「いつも良い結果が得られるとはかぎりゃんよ。これだけの結果をもとにすれば、奇抜さはなくとも調和のとれたよい論文が書けるはずだ。」とおっしゃった。恩師の助言を参考に論文を書き上げ研究会で発表すると評価され、学会誌にも掲載された。論文を書くときにおいても調和がいかに大切であるかを悟った次第である。

早速この経緯を弓道部誌の『弦音』に寄稿し、勉学と弓道を両立させた学生生活を送ることはたいして難しいことではないこと、調和の取れた学生生活は留年という失敗を確実に防いでくれることを述べた。これ以後、毎年弓道部誌『弦音』に寄稿し、折々に思うことを書いてきた。この頃から弓道部員に対して口癖のように言い聞かせてきたことがある。「一に勉強、二に勉強、三、四なくて、五に余暇の善用の部活動である。このことを決して忘れてはいけない。」

やがて少しずつではあるが留年率は低くなってきたが、留年が皆無とはならなかった。弓道部員の絶対数が多すぎて幹部学生の目が全てに行き届かなかったのだろう。当時、新入生の運動部への入部数が減少し続け、チームを組むことすら難しい運動部も珍しくない状況だったにもかかわらず、弓道部は人気があり入部希望者は毎年多かった。礼を重んじ、作法に則って弓を射る所作は凛として美しく、静的な要素があふれ出る個人プレーと見なされていたようだ。狭い弓道場の敷地は部員であふれかえり、さりとて多くの運動部が必ず行っている基礎トレーニングに励む様子は全く見られず、その重要性は幹部学生の意識にもなかったようだ。

その頃、弓道部の指導者として鳥井正師範をお迎えした。師範には毎週大津より弓道場まで来ていただき指導を賜った。たいへん温厚なお方で丁寧に部員を指導して下った。あるとき、師範と基礎トレーニ

ングについて話し合う機会があった。師範はその必要性について熱く語られ、私と全く同じ考えであることが分かり心強く思ったが、本来、部活動は学生諸君の自主性に委ねられているので強制的な言動は差し控え、師範ともども学生諸君には折に触れてその重要性についてやんわりと諭すことしかできなかった。それでも基礎トレーニングを本格的に導入しようとする機運は高まらず、多くの弓道部員の基礎体力のなさに思わず「基礎トレーニングをしない君らは運動部とは思えない!」と苦言を呈したことが幾度となくあったが、これを言う度に何とも言えぬ不安感につつまれ、やるせない気持ちになっていった。

4. 気がかりなこと

弓道部の顧問を引き受けて以来ずっと気になっていたことがある。それは、弓道が殺傷能力のある武器を持って練習や競技をすることと、弓道場という体育施設を独占して使用しているという点であった。この点において弓道部は運動部の中でも特異な存在であり、これが私の心配の種であった。とくに部活動の危害防止については、学生諸君に対して師範ともども常日頃から注意喚起を行うとともに、私は自身自身の経験をもとに安全性やいのちについて積極的に『弦音』に寄稿し、危機管理の啓発に努めてきた。しかし残念なことに、大きな事故が二度発生した。

一つは、新入生が巻藁練習中に暴発させた矢が板塀の上端をかすめ、道路を越えて民家の台所に飛び込んだ一件である。もし台所に人が居たらと思うと、背筋が寒くなった。ただちに、大学として再発防止策を明示し、平謝りをしてお詫しを願った次第である。

その次に起ったことは、新聞沙汰になってもおかしくないような類の事故だった。それは、射手側と相互確認の下で赤旗を立てて下級生が「矢取り」をしている最中に、上級生がフラフラと射場に入って来て矢を放ち、それが下級生の脛を直撃した事故である。暑い夏場の練習中のことで、Gパンの裾を折り返していた箇所矢が命中したので軽傷で済んだが、当たり所が悪ければ生命にかかわる最悪の事態に陥るところであった。そうなれば私は責任を取り職を辞していただろうし、弓道部は廃部になっていたかもしれない。

この事故がもとで下級生と上級生の間に拭い難い不信感が生まれ、弓道部の存続すら危ぶまれるよう

になった。不信感を取り除くために部員間の話し合いが何度も持たれたが埒が明かず、上級生と下級生の溝はますます深くなるばかりだった。事態を収拾させるために鳥井師範と協議し、厳しい処分を取らざるを得なかった。矢を射かけた当事者とこれを一方的に庇った上級生を退部とし、前者は鳥井師範の道場預かりとして心のケアをすることでこの問題に決着がついた。本来ならば、間近に迫った近畿国立大学体育大会などは出場不可能であったが、ときの学生委員であった体育の宮本孝教授のご配慮により何事もなく出場できるようにしていただいた。

その後、一連の事故の原因究明と対応策について師範と検討を重ねていくと、「基礎体力」の欠如が根本にあることが判明したので、日々の練習に筋力トレーニング等を課すことを強制した。早速、弓道部全員を学内のトレーニングセンターに集め、体育の三神憲一教授をお願いをして科学的な筋トレの方法を教えていただいた。

その後、日々の弓道練習の中に筋トレが組込まれ、すべての部員が筋トレに励むようになった。筋トレ導入の効果は女子部員に如実に現れ、全日本学生弓道選手権大会に出場するまでになり優秀な成績を収めた。全国大会に引率された鳥井師範のお喜びようはこの上もなく、そのお顔が今でも思い出される。

この頃より、経済学部の子の正課の体育授業に弓道体験が導入されるようになり、弓道部員が授業のアシスタントを務めてくれた。この試みは女子学生にたいへん好評で、学期末の授業評価アンケートでは「新鮮な体験であり何回も弓道の授業をして欲しい。」という声が毎年寄せられた。弓道体験は今も正課の体育授業の中で脈々と続けられている。

5. 弓道場の移転問題

初代の弓道場は1923年(大正12年)彦根高等商業学校開校とともに校内に設置された。現在の大合併教室東側の濠に面したところである。この場所は旧中濠に接するところで彦根城郭内であり、弓道の鍛錬をするには最高の場所であった。

戦後しばらくは武道が禁じられていた関係で、弓道場は官舎に改造されていたようだが、1970年(昭和45年)になって二代目の弓道場が、彦根市立西中学校東側の金亀町官舎跡に新築された。ここからも彦根城西ノ丸三重櫓を見上げることができ、弓道

の鍛錬を行うにはこの上ない環境ではあったが、公式戦を行うには狭すぎた。改築する余地はあったが、この場所は彦根城内の史跡に指定されているので現状を改変することが一切許されない。増築はおろか土を掘る工事の類は一切ご法度場所だったので、老朽化した弓道場の維持管理に困りはてていた。とりわけ問題となっていたのは、道場の入り口付近にあった更衣室とトイレである。狭いうえに男女共用であるので、その建替は喫緊の課題となっていた。

そうこうするうちに、大学が留学生会館用にと取得していた（大学の北門に近い）土地の活用が進まなくなったことにより、にわかに弓道場建替計画が動き出した。弓道が正課の体育授業に組込まれているという実績は大きかった。三神教授をはじめとする体育担当教員の方々の強力な後押しがあったことは言うまでもない。これにこたえて下さった大学執行部や経済学部の方々の役職の方々、および厳しい財政事情のもとで知恵を絞っていただいた松浦功理事（財務・施設担当）をはじめとする関連事務部門の方々のご尽力により、三代目弓道場新築への道が開けた。心より感謝申し上げる次第である。地元自治会からは、この地に弓道場を開設することにご理解を戴くことができ、彦根城と西ノ丸九重櫓を借景とする弓道場新設計画が加速した。

新弓道場の設計に際しては、師範と弓道部員の要望を設計に反映させるために大学施設課と協議できる場を設けた。弓道部員が建築模型を見ながら施設課で協議を重ね続けた情景を今でも鮮明に覚えている。このようにして公式戦が行える三代目の新弓道場が私の定年退職とともに完成したことは望外の喜びであった。

その新弓道場開きの挨拶において「彦根高等商業学校以来の伝統を有する滋賀大学経済学部弓道部の学生として誇りを持って学業に励みつつ、男子学生にあつては弓矢の誉を一身に集めた那須与一や和佐大八郎をめざし、また女子学生にあつても巴板額をめざして弓道に精進されることを切に望む。」と述べたことが昨日の事のように思い出される。

6. むすびにかえて

顧問であった四半世紀を振り返れば、あの時こうしておけば良かった、なぜこのようにしなかったのだろうか等々、忸怩たる思いがこみあげてくる。素人

であった者がまがりなりにも顧問としてやってこれたのは、ひとえに学内外の多くの方々に支え続けていただいたお陰であり、感謝の念に堪えない。

私が定年退職をするにあたり、道上静香教授が弓道部の顧問を引き継いで下さり、後顧の憂いは全くなかった。弓道部員は、道上教授から厳しくも思いやりに満ちたご教導を長く仰げることだろう。さらに弓道の指導者として弓道部OBの川瀬敏裕師範をお迎えできたことは本当に喜ばしいことであり、弓道部員のよき理解者として長くご指導いただけるものと思う。

1923年創部の弓道部は、彦根高等商業学校・滋賀大学経済学部とともに1世紀にわたり先人たちの想いと歴史を紡いできた。これを常に見守ってきたのが彦根城郭に位置した大学をとりまく歴史的風致であり、彦根高等商業学校第二代矢野貫城校長はこの歴史的風致の維持に特に熱心で、100年後の本学の風致を心に描いて精力的に植樹をされキャンパス整備に尽力されたと聞いている。彦根市では、暫定リストに記載された彦根城を世界遺産に登録するために不断の努力をする一方で、歴史まちづくり法に基づき歴史的風致の維持向上を長年にわたり行ってきた。しかし、近年、本学の歴史的風致を構成する要素の一部が、無残にも伐採されてしまったことは遺憾の極みである。これは持続可能な歴史的風致の維持向上をめざす地域の努力と、われわれの先任教官の努力を無にする行為であって、理解に苦しむ。

100年の歴史を有する弓道部にあっては、滋賀大学の発展とともに歴史的風致を守りつつ、永遠にその歴史を紡ぎ続けていくことを心から願っている。

